

藤原広嗣論 : 文苑

著者	笠間, 益三
雑誌名	龍南會雜誌
巻	22
ページ	42-43
発行年	1893-12-26
URL	http://hdl.handle.net/2298/4342

天下絕境使人應接不暇停嶋十余日或漁或製或交漁夫群詳其慣性之所在或訪村吏
 調其漁事之如何拮据了第二回調查吾輩之發鳥羽大塚先生代監之始終指揮從事至
 八月三十一日事全結局乃聚村民饗應訣別有詩曰螺杯美酒漲紅潮益裏鯛鱒潑刺跳
 獻酬捧君君勿惜何時復有此良霄翌朝至鳥羽會乙組此日步謁伊勢兩大神宮已夜歸
 宿時風雨頻至便船不發港爲之滯在二日至九月三日海運丸解纜吾等忽々訣大塚先
 生御木本幸吉君及新井雄馬君上舟有詩曰一天秋色暗清灣無數嶋巒指顧間不忍歸
 舟離港埠泣向知已鳥羽山船執前回路一晝夜歸着江都實九月六日也

文苑

齋田生携孔子遭厄圖來索贊。即援筆題二十四字。 內田 遠 湖

造次顛沛。所執唯仁。一時身屈。萬世道伸。不懼不惑。吁嗟聖人。

藤原廣嗣論

教授 笠間益三

雖其志出於愛君憂國而無他意其蹤跡苟有可議則人將論其跡而不問其心何則心不
 可見而跡可徵也自古世多有之而如藤原廣嗣事豈亦不然乎哉當廣嗣之時庸君在上
 乾綱頽弛大臣姑息百度無張至使姦僧若玄昉者蔑如王尊出入宮禁而自恣姦穢如吉
 備眞備頗負時望身列大臣而不言是何等朝廷乎廣嗣憂之久矣故其在京也上書請斥

玄昉不聽。其及赴任。上表指斥時政。論玄昉及眞備之姦。朝議以爲謀叛。發兵伐之。廣嗣輒舉兵于西陲。其意固在除姦穢而清君側爾。決非有叛意也。但其矯官符。急遽舉兵。其跡固有可議者。是所以取叛名也。廣嗣在陔僻千里之外。內無大臣爲之因緣。外無強援爲之聲勢。孤立獨行。欲以成其志難矣。故官軍一至。廣嗣不暇自救。當此時。雖欲曰吾非敢謀叛也。欲除君側之姦耳。無可以爲証據者。故佐伯常人。舉其矯官符之一事。詰之。輒足以箝廣嗣。清君側之口。彼有按我之跡之權。我無明我之心之道。不能不屈服而退走。遂身負叛名而死。萬古無雪其冤者。可悲矣。是由其跡有可議者而然也。惜矣哉。故有憂國之心者。欲立功顯名。則宜深謀遠慮。無跡可議。而後動也。不然則適爲姦臣所籍口。身斃于汗名之下。而無補於國家。吾非獨爲廣嗣惜也。

弓也字

東園のあるじ

ある人來り問ひて曰はく、弓を射ることは衛生に可なるは論を俟たされど、他に妙味はなきにや、答へて曰はく、學生の詞ども覺えぬものかを、いかに弓の字をよむや、うの人うち傾きて時經をもも辨解し得ず、たのれはこの日それのあてある人々と梅見を約せり、空しく過すべき時あらねば、更よ口を開きて曰はく、本を務めざれば弓の一字すら説き得ず、今の諸學科の多きを苦しむも、本をわきらかにせざればあり、いかにとをまば第一にまれ第二にまれ外國語にたどくしきは、漢文に精まからざればあり、うれに精まからざるは、けだし國語に疎まきはあり、見よ學びて時よ之を習ふとは、是古の博士が國語もてよくに、その助辭を施し、あり、されど顔回ある者ありの、あるは、後人の誤りしにて